



## 子どもの工作に寄り添う

子どもたちとワークショップをする中で感じたことを発信したいと始めたこの連載も、早いもので5年目となります。今シリーズではワークショップの中でよく受ける質問について、僕がどのように考えているかお答えします。

考えるって  
めもしろいかも!?



### こだわりのパーツ

『ペンギンとひなたち』というプログラムの中で、紙袋を使ってペンギンを作る工作をやっていたときのこと。一人の男の子が、こちらが伝えたやり方とは違う形で紙袋を折り始めました。スタッフがかうやるんだよと再度お手本を見せても、わき目もふらずにペンギンの頭になるところを何度も折り直ししながら何かをしきりに模索しているようでした。

よく観察していると、頭の部分をできるだけ立体的に丸くしようとしているように見えました。そこで、「こう折っているのは、頭を丸くしようとしているの?」と聞いてみました。すると、彼は手を止めて「うん、そう」と一言返事をし、また手を動かし始めました。僕は「そかそか、ペンギンの頭は丸いのね。だったら、ここを引っ張るともつと広がるよ」と伝えました。

結局、男の子が作ったペンギンは、体に対してずいぶんと頭が大きくなってし

まいましたが、彼は自分のこだわりポイントを形にできたので満足そう。大人たちからみると不恰好に見えますが、彼の中では自分のお気に入りのペンギンができあがりしました。

### 子どもはアーティスト

大人は実際の形やバランスを優先しがちですが、子どもたちの工作は頭の中にあるイメージが反映されます。印象に残った部分が頭の中で補正され、強調された形をこだわって表現しようとする



のです。パーツにこだわる子、色や模様こだわりの子、もちろん全体のバランスにこだわる子もいますが、こだわりポイントはそれぞれです。

現実の姿や完成図に忠実に作っていないのではなく、子どもたちが現実と空想を行ったり来たりしながら表現をしていく様はまさにアーティスト。こだわりポイントには子どもたちの特性や興味関心が反映されやすいので、その子の内側に広がる世界を知るヒントにもなります。子どもの工作に関わる際は、大人が想定している完成形に寄せるのではなく、その子が何にこだわりたいのかを確認し、それを満足いくまで追求できるように寄り添っていきながら、その思考と一緒に味わうのがおすすめです。

### 鴨川 光

(かみがわ ひかる)

1987年茨城県生まれ。ジャパンGEMSセンター主任研究員。早稲田大学大学院教育学研究科修了後、2013年6月より現職。子どもの思考力や社会性の発達について研究している。ワークショップやボランティアを通して子どもたちと一緒に成長中。

